

イギリス小説と批評の研究

原 英 一

最初の驚きとそれに続く熱気が沈静化したとはいえ、カズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞（2017）に触発された議論，研究が盛んに続いている。このグローバルな作家の日本人研究者は、日本文学・文化に精通しているはずなので、特権的立場にある。なぜなら、日本的なものが、それが具体的には何であるかは措くとして、イシグロの作家としての本質の重要な一面であることは否定できないからだ。ところが、日本人による、その特権を生かした、優れたイシグロ論には、なかなか出逢えない。今回読んだ数々の論文にも、見るべきものは少なかった。

田尻芳樹・三村尚央（編）『カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を読む』（水声社，2018.9）で、田尻芳樹氏が興味深いことを述べている。2014年に氏の主催による国際イシグロ・シンポジウムが開催された。海外から6名の発表者が参加したのだが、彼らはイシグロと日本文学を結びつけた日本人の発表に「まったく関心を示さなかった」のである（「まえがき」）。対話が成立しなかったのは、われわれ日本人研究者が、その特権的立場を生かした、十分な貢献ができていないことの証明だろう。本書の企画は、2017年に開催された新英米文学会の『わたしを離さないで』シンポジウムからスタートした。イシグロの作品中で最も議論されることが多くなったこの小説について、5篇の海外論文翻訳と8篇の日本人研究者による論文が掲載されている。日本人による論文では、秦邦生氏の「「羨む者たち」の共同体——『わたしを離さないで』における嫉妬、羨望、愛」が、イシグロの本質に迫ったものである。他に、田尻芳樹氏の「『わたしを離さないで』におけるリベラル・ヒューマニズム批判」と森川慎也氏の「クローンはなぜ逃げないのか——同時代の人間認識とカズオ・イシグロの人間観」が、ときにイシグロのテキストから離れすぎの感がありながらも、非常に説得力があった。

荘中孝之・三村尚央・森川慎也（編）『カズオ・イシグロの視線——記憶・想像・郷愁』（作品社，2018.7）では、テキストをまともに読めないために、完全に的外れの議論を延々と展開するものもあった。そんな中では、荘中孝之氏の「記憶の奥底に横たわるもの——『遠い山なみの光』における湿地」と斎藤兆史氏の「『日の名残り』というテキストのからくり」は、テキストにしなやかに接して、鋭く切り込む好論。武富利亜氏の「カズオ・イシグロと日本の巨匠——小津安二郎、成瀬巳喜男、川端康成」は、イシグロ自身が認めている日本映画の影響を詳細に分析したもので、興味深かった。

回顧と展望

Kumiko Hoshi, *D. H. Lawrence and Pre-Einstein Modernist Relativity* (Cambridge Scholars Publishing, 2018) は、日本人研究者がイギリスで出版した研究書。ニュートンの絶対性からのパラダイム変換である相対性理論は、モダニスト、ロレンスの思想と創作活動にぴったりと適合した。しかし、星氏によれば、アインシュタインの理論は、すでに19世紀末から始まっていた文学と美術におけるモダニズムに、科学の面から裏付けを与えたものであったというべきである。本書は「アインシュタイン以前のモダニストの相対性」を、ロレンスの小説4篇、*Women in Love*, *The Lost Girl*, *Aaron's Rod*, *The Fox* を中心に、論じたものである。相対性を手がかりとすれば、これらの作品中に見られる多くの矛盾や議論的になっている点が、鮮やかに説明される。本書の特徴は、モダニストとしてのロレンスをアインシュタインとの相関の中で再解釈しているばかりではなく、レンブラント、デュシャン、セザンヌ、さらにキュービズムやダダイスムなどの美術との有機的な関係を描き出していることにある。日本人研究者がイギリスで出版したオリジナルな研究書であることは、高く評価されるべきだろう。

太田素子『ヴァージニア・ウルフの「パーティ空間」』（英宝社、2019.3）は、これまでに発表されてきた論考を、ウルフにおける時間と空間、とくに「パーティ空間」を中心として、まとめたもの。ウルフは、容赦なく流れる「時計の時間」にあらがうものとして、「瞬間」のヴィジョンを追求した。そのような「瞬間」を積極的に捉えるために設定された「儀式」が「パーティ」である。とくに、中期の三小説、『ダロウエイ夫人』、『灯台へ』、『波』では、「パーティ」という社交の空間が、時間との関係で深い意義を与えられる。太田氏はドイツの社会学者ジンメル思想やクリストファー・エイムズの「パーティ論」、山崎正和の『社交する人間』等を援用しながら、ウルフの文学に新たな光を与えることを試みている。

野谷啓二『オックスフォード運動と英文学』（開文社出版、2018.5）は、ジョン・ヘンリー・ニューマンが率いたオックスフォード運動の軌跡を追ったもの。野谷氏は、我が国ではほとんど研究されていないこの運動をイングランドの思想史、宗教史の中で詳細に位置づけることから始めて、20世紀前半までの「カトリック文学」を論じている。ニューマンのカトリック改宗に至るまでの軌跡が詳細にたどられるだけでなく、彼が書いた小説『損と得』^{ロス・アンド・ゲイン}と『カリスタ』も論じられる。カトリック系の作家、ヒレア・ペロック、G. K. チェスタトン、イーヴリン・ウォーが受け継いだニューマンの血脈が明らかにされ、さらに知られざる作家ジョゼフ・ヘンリー・ショートハウスの『ジョン・イングルサント』に一つの章を割いて、詳しく紹介している。合理主義、自然主義が主潮となる中で、反近代主義、超自然主義を本質としたニューマンの思想とその後のカトリック作家たちの文学は、現代において再考されるべきだろう。

野末紀之『文体のポリティクス——ウォルター・ペイターの闘争とその戦略』（論創

社、2018.11)での「文体のポリティクス」とは、「芸術的急進派であった唯美主義者と、唯美主義者を批判する保守派との、文体とそれに直結する問題にかんする抗争」（「序論」）のことである。本書では、ペイターがロバート・ブキャナン、ウィリアム・ジョン・コータブなどの保守派に反撃し、あるいは彼らを批判する際に、どのような文体上の戦略を用いたかが、詳細に検討される。『享楽主義者マリウス』をはじめ、ペイターの著作の中に「文体による闘争」がいかにか表れているかをたどり、ヴィクトリア朝後期の、一つの文化的状況を浮き彫りにしていく。

中田元子『乳母の文化史——一九世紀イギリス社会に関する一考察』（人文書院、2019.1）で扱われる「乳母」は、子供の養育係ではなく、授乳する「乳母^{フエットナーズ}」のことである。乳母は、文学作品にもしばしば登場し、なじみ深い。ところが、その実態については、ほとんど知られていない。乳母はどのような社会階層の出であったのか。乳母自身の子供たちの授乳、養育はどうなっていたのか。本書は、19世紀イギリス社会で乳母が果たした役割やその周辺の社会問題を研究したものである。手がかりが限られている中、『タイムズ』紙の求人・求職広告や当時の家事・育児書などの一次資料を丹念にリサーチし、乳母の姿を浮かび上がらせる。ディケンズの『ドンビー父子』やジョージ・ムアの『エステー・ウォーターズ』も扱われるが、本書の主眼は、あくまでも当時の現実の乳母の実態である。未婚の母の働き口であったことなど、いろいろ興味深い事実が述べられている。

ジョイス研究が相変わらず盛んである。単著としては、田村章『ジョイスの拡がり——インターテキスト・絵画・歴史』（春風社、2019.3）。田村氏は、ジョイスのテキストの広大な拡がりや深い奥行きを他のテキストとの関係（第一部「テキスト／インターテキスト」）、視覚芸術との関連（第二部「絵画への拡がり」）、さらに歴史記述の問題（第三部「歴史への拡がり」）という三つの観点を設定して検討する。カーライル『衣装哲学』、アイルランド初のキュービストであるメイニー・ジェレット、クリミア戦争などが縦横に取り上げられ、『若き日の芸術家の肖像』、『ユリシーズ』、『フィネガンズ・ウェイク』の新たな意味が探求されていく。

高橋渡・河原真也・田多良俊樹（編）『ジョイスへの扉——『若き日の芸術家の肖像』を開く十二の鍵』（英宝社、2019.3）は、高橋渡氏の退職記念論文集でもある。『若き日の芸術家の肖像』については、すでに金井嘉彦・道木一弘（編）『ジョイスの迷宮——『若き日の芸術家の肖像』に嵌る方法』（2016）があり、本書の執筆者のうち4名もそこに参加している。いずれの論文も高いレベルにあるが、中でも、南谷奉良氏の「ジョイスの〈ベヒーモス〉——『ステイーヴン・ヒアロー』あるいは『若き生の断章』試論」が圧倒的な活力に満ちていて、実に面白く、刺激的。今後の活躍が非常に期待される内容であった。

松山献『E. M. フォースターとアングリカニズムの精神』（彩流社、2018.7）によれ

回顧と展望

ば、フォースターは小説の中で〈見えないもの〉を探求していた。その探求はアングリカニズムに深く結びついているという。キリスト教を捨てさり、究極的には西欧市民社会そのものを否定した作家が、実は英国教会神学の基盤であるアングリカニズムに深く共鳴していた。本書は、フォースターに見られるアングリカニズムの精神を、〈土地の霊〉、〈象徴的瞬間〉、〈個人的人間関係〉、〈連続性〉など、彼の小説で繰り返されるテーマに沿って追求し、棄教者フォースターの意外な側面を切り開いている。

田中祐子『公共的知識人の誕生——スウィフトとその時代』（昭和堂、2019.3）は、索引を含めると約450ページという大著。ジョナサン・スウィフトが「公共的知識人」であることは、18世紀イギリス文学の研究者にとって、いまさら言われるまでもない前提だ。本書では、さまざまな著作を通じて、スウィフトと公共圏との関わりの軌跡が丹念に辿られる。しかし、この時代を知悉している者から見ると、既知の事実の羅列という印象が拭えない。第Ⅲ部『『ガリヴァー旅行記』とその後』では、著者によれば、信用経済の拡大とそれを基盤とした金融制度批判としての、この作品が持つ意義を深く検討し、「新しい解釈」を提供しているという。しかし、西山徹『ジョナサン・スウィフトと重商主義』（2004）という先行研究があるのだから、これも本当に新しいのかどうか、専門家の判定を俟つことになるだろう。

永松美保『マーガレット・ドラブル文学を読む——リアリズム小説から実験小説へ』（九州大学出版会、2019.3）は、博士論文を元にしたもの。今日のイギリス文学研究者にとって、ドラブルは、小説家というよりは、英文学者として、なじみがあるかもしれない。『礪白』（1965）は、一時期、日本の大学、とくに女子大の英文科で、非常に人気のある小説であった。他に、『黄金のイエルサレム』（1967）、『滝』（1969）が翻訳され、ドラブルは、1960年代から70年代にかけて、新しいイギリス小説の代表のように扱われていた。その後、2018年に『昏い水』（2016）が翻訳されるまで、日本の読書界ではほぼ忘れられたのは、彼女の小説が、初期の伝統的なリアリズムから離れて、難解になっていったことが最大の要因だ。本書は、ドラブルの今日に至るまでの小説家としての変化の軌跡を追うのだが、扱われるのは『礪白』等、わずか6篇のみ。ドラブルの長編は19篇あるから、この作家の全体像を捉えるものではない。

原公章『英文学と教養のために』（大阪教育図書、2018.10）の英語副題は *Further Salmagundi*。本書は英語副題が *Salmagundi* だった原氏の前著『英文学と英語のために』（2003）の続編。公開講座の原稿、論文、書評（対象書籍の著者への私信を含む）などの雑多な文章を集めた文字通りの「ごたまぜ」（*salmagundi*）である。そこから浮かび上がるのは、古き良き英文科的「教養」であり、それを無駄なものとして排除し、おとしめようとする現代の一般的傾向に対する抵抗、反撃である。

白井雅美『記憶と共生するボーダレス文学——9.11プレリユードから3.11プロローグへ』（英宝社、2018.8）の著者によれば、「本書は、現代に生きる私たちが、記憶の中

イギリス小説と批評の研究

にある真実を追究し、その記憶と共生する文学を様々な境界を越えて探索する作家と出会えることを祈って書き上げた」（「序文」）とのこと。ヴァージニア・ウルフ、カズオ・イシグロ、ジョセフ・オニール、エイミー・ウォルドマン、津島佑子、村上春樹が論じられる。

木下未果子『共鳴するジョージ・エリオットとヴァージニア・ウルフ——「私」から「私たち」へ』（彩流社、2018.3）によれば、ジョージ・エリオットとヴァージニア・ウルフは、「個」と「集合体」に拘った問題を一貫して扱っていた。ハンナ・アーレントの「公的」と「私的」の概念、さらに「物語ること」と「親密性」を援用しつつ、二人の作家が半世紀の時を隔てて共鳴していく有様が分析される。

今回読んだ論文集の中で最も粒がそろっていたのは、河内恵子（編）『現代イギリス小説の「今」——記憶と歴史』（彩流社、2018.3）。21世紀に入って、すでに20年が過ぎようとしている。現在のイギリス小説の状況はどうなっているのか、それを検討するのがこの論文集である。日本英文学会大会でのシンポジウムがきっかけとなって、卓越した6名の研究者が結集した。河内恵子氏のパット・バーカー論、遠藤不比人氏のカズオ・イシグロ論、生駒夏美氏のアリ・スミス論、大石和欣氏のサラ・ウォーターズ論、板倉厳一郎氏のデイヴィッド・ミッチェルとその他3作家論、いずれも非常に充実していて、読み応えがある（中でも遠藤氏のイシグロ論が秀抜）。これらの作家たちの作品には、20世紀の記憶と歴史が、さまざまな形で、深く刻印されている。

中央大学人文科学研究所の編集になる論文集が二つ出版された。『英文学と映画』（中央大学出版部、2019.3）は、中央大学の研究チーム「英文学と映画」の研究成果をまとめた論文集である。篠崎実氏のオーソン・ウェルズによる『オセロー』アダプテーションの検討から始まるが、ジェイン・オースティンなどの小説の映画化についての論考がほとんどである。新井潤美、松本朗、丹治愛など、実力のある客員研究員の論文が、全体に重厚さを加えている。

同じく、中央大学人文科学研究所（編）『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』（中央大学出版部、2018.3）は、中央大学の研究チーム、「ミドルブラウ文化研究会」の研究成果である。このチームを中心として、2014年には日本英文学会全国大会で「ミドルブラウという名の挑発」というシンポジウムも開催している。ハイブラウに対して蔑視され、軽視されてきたミドルブラウが20世紀の文化の中で、重要な位置を占めていたことを主張して、跡づける。ジョイスやウルフあるいはT.S.エリオットなどのモダニズム文学が英文学研究の主流を占め、アーノルド・ベネットやジョン・ゴールズワージーが片隅に追いやられた「モダニズム研究帝国主義」（「序」）に対して果敢に挑戦するという気概が感じられる。執筆陣も、武藤浩史、小川公代、松本朗、秦邦生、井川ちとせなど、気鋭の各氏が名を連ね、充実した論文集となった。

富士川義之（編）『ノンフィクションの英米文学』（金星堂、2018.10）では、前半の

回顧と展望

「イギリス編」と後半の「アメリカ編」に分けて、ノンフィクション文学が論じられている。ただし、ノンフィクションといっても、実際は伝記文学あるいはその周辺が中心であるから、「ライフ・ライティングの英米文学」として、本書は読まれるべきだろう（ネイチャー・ライティングなども入っている）。「イギリス編」では、サミュエル・ジョンソンから始まり、チャールズ・ラム、ド・クインシー、J. M. バリーが扱われ、さらに、田尻芳樹氏による日本の忘れられたモダニスト、春山行夫の伝記のための「エスキース」が収められる。本書が編まれた経緯は詳述されないが、編者の富士川氏の『ある文人学者の肖像』（2014）が与えた衝撃があったことは間違いない。実力のある執筆陣による充実した論考は、各章ともコンパクトにまとめられていて、読みやすい。

日本ジョンソン協会（編）『十八世紀イギリス文学研究[第6号]——旅、ジェンダー、間テキスト性』（開拓社、2018.7）は、日本ジョンソン協会が4年に一度発行する論文集。今回の執筆者は11名。第5号（2014）の15名に比べるとスリムになった。ベテランから若手までの執筆陣による各論文の質には、当然ながら、ばらつきがある。原田範行氏の「近代小説の誕生と日本表象——サルマナザール、デフォー、スウィフト」は奥行きのある、示唆に富んだ論考。英語による論文は、吉田直希氏によるものが唯一。本書全体が英語で出版されていれば、学術的意義が一層高まったことだろう。

坂本武（編）『ローレンス・スターンの世界』（開文社出版、2018.5）は、スターンという「不世出のイギリス作家の面白さを世に伝えたい」（「はしがき」）という動機から出発した論文集。スターンは、漱石以来、日本でもよく知られており、朱牟田夏雄の名訳があるので、その面白さをあらためて一般読者に知らしめる必要があるのだろうか。名のみ高くてテキストが実際に読まれることがあまりなく、作家活動の全体像も知られていないということならば、別な編集の仕方があったのではないか。武田将明、原田範行、鈴木雅之、井石哲也等、優れた十八世紀研究者各氏の論考があって、論文集としては高いレベルにある。

日本のギッシング研究の草分けであり、ディケンズ・フェロウシップ日本支部の名誉支部長でもある小池滋氏が、松岡光治（編）『ディケンズとギッシング——底流をなすものと似て非なるもの』（大阪教育図書、2018.12）に、巻頭言を寄せている。ディケンズが知的読者層から不当に軽視あるいは蔑視すらされるようになった時代に、その後の再評価の基礎となるディケンズ論を著したのはギッシングであった。本書は、二人の作家のさまざまな面の対照研究であるが、どちらかといえばギッシングに重点が置かれ、啓発的な部分が多い。それにしても、この副題はなくもがな、付けるなら一工夫あってほしかった。

日本ギャスケル協会（編）『比較で照らすギャスケル文学——創立30周年記念』（大阪教育図書、2018.10）は、日本ギャスケル協会の創立30周年を記念する論文集。第1部「ギャスケル文学の真価と発展」、第2部「同時代人と切り結ぶ」、第3部「時空を

イギリス小説と批評の研究

超えての交流」に分けられ、20篇の論文が収録されている。英語によるものが2篇あるが、全てを英語によるものとしていけば、Mitsuharu Matsuoka, ed. *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays* (2015) に比肩する意義を持ち得たかもしれない。同じくギヤスケル協会編集による『エリザベス・ギヤスケル中・短編小説研究——没後150年記念』(2015)が出て間もない。短期間にこれだけ多数の論文が刊行されれば、相対的に中身が薄くなるのは、やむをえない。

福田敬子・上野直子・松井優子(編)『憑依する英語圏テキスト——亡霊・血・まぼろし』(音羽書房鶴見書店, 2018.8)は、お茶の水女子大学大学院で富山太佳夫氏の教えを受けた人たちによる論文集。富山氏が序文を寄せている。イギリス小説関係としては、武田ちあき氏の「サッチャーのお化け——ヨークシャー学校小説シリーズによるみがえる英国のまぼろし」と松井優子氏の「連合以前という亡霊——スコットランド分離／独立小説の展開と未来の想像」。本書全体の主題は「英語圏テキスト」であり、地域や時代、ジャンルにとらわれない議論が展開されている。富山氏の柔軟な思考力が及ぼした影響が強く感じられる論文集である。(東北大学名誉教授)